

【学区の沿革と概要】

鈴川地区は、奥羽山脈を背景として、西側を馬見ヶ崎川が流れる山紫水明の地に位置しています。

遠く平安時代の昔に、笹谷峠より出羽国に通ずる古い街道の最上駅がおかれ、中央との連絡地であったと言われています。また、天皇の勅命で、大野東人が東北地方を鎮定し終え、都へ帰る途中、伊勢神宮から授けられた銀の鍵を祀って神明宮を創建しました。これが印役神明宮で、空をつく杉の木や太い樺がそそり立ち、この郷の古さのシンボルになっています。

このように古い歴史に培われてきたこの地区が「鈴川」になったのは、明治の村制施行からです。上記の神明宮を伊勢神宮とし、馬見ヶ崎川を五十鈴川と見立て、鈴川という村名にしたのです。

江戸時代の初め、山形城主鳥居忠政は、馬見ヶ崎川の流れを洪水から救うため、それまで城下町を東から真っすぐ西に向かって流れていた流れを盃山の麓から大きくカーブさせ、北の方向に向け、現在の流れに変える大工事を完遂させました。それからの鈴川、特に双月・印役・山家は、終始洪水に見舞われるようになりました。しかも、広大な耕地が河原にとられ、犠牲になりました。その代償として、双月に紙すき業、印役・山家に鞠製造の特権と振興策が授けられ、数百年にわたって住民の生活を支えてきました。以来、幾多の変遷をへて昭和に入ると、時代の趨勢に従って山形市と合併しました。(昭和18年)

戦後、鈴川地区が大きな変貌をとげたのは、昭和43年、国道13号山形バイパスが通過するに及び、ベッドタウン化し、急激に人口が増加したことにあります。大正時代中頃、わずか5,000人たらずの人口が18,000人にもなりました。それに伴って、鈴川小学校の児童も1,800人をこえる県下一の大規模校になり、昭和56年、東小学校を分離しました。その後も人口はゆるやかに増加し、現在の人口は約2万人で、世帯数も約7千戸になっています。

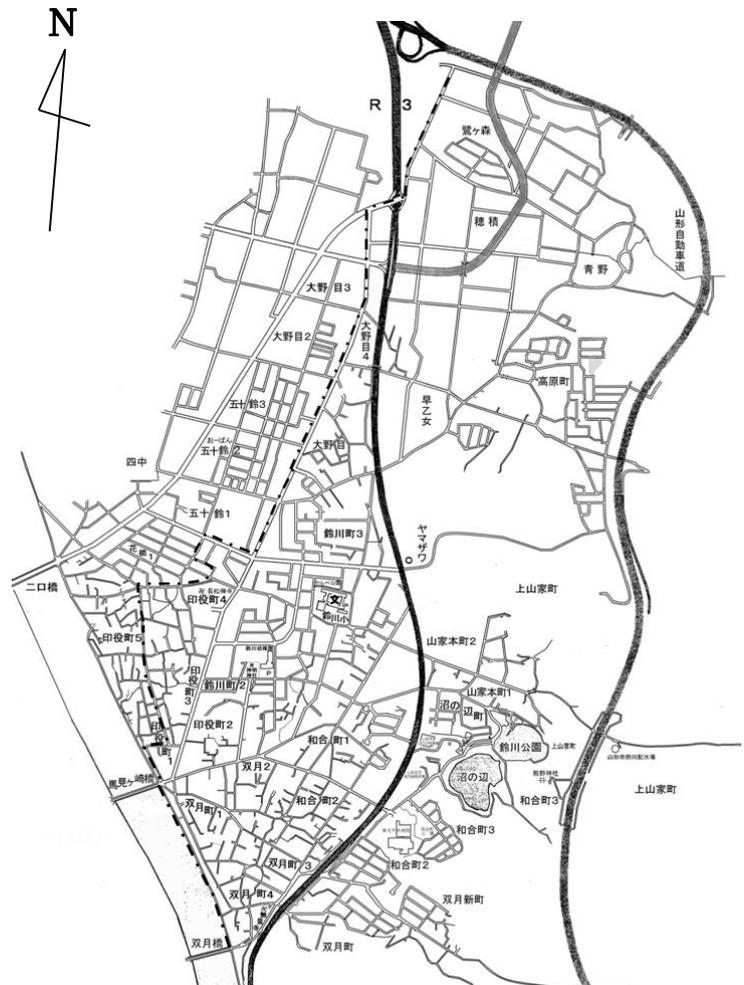
町内会は、以前は、昔からの双月、和合、山家、印役、高原、大野目だけでしたが、各々複数になり、沼の辺、神明、五十鈴など新町内を合わせると、その数は50町内になります。

かつては、鈴川の西北部一帯は広々とした実り豊かな田園地帯でした。ところが、前述のような市街化が進み、農家（農業従事者のいる世帯）は、昭和45年に650戸ありましたが、昭和60年になると、その三分の一の240戸に、平成7年には199戸に激減しました。逆に、建設、製造、卸小売業などに携わる人が増え、ほとんどが兼業農家になってきております。

また、現在、山形自動車道が開通し、本学区内東部山間沿いを走っております。

近年、鈴川小学校付近の区画整理が完成し、新しい町づくりが進められ、学校周辺はめざましい発展を続けています。また、平成11年から、高原地区に住宅団地が造成され、山形市のベッドタウンとしての機能をもつようになっています。

特に、北側を東西に通る東道路は、「ベルタウン通り」の愛称で呼ばれる商店街になっており、西道路は、専門医院が並ぶ通称「医者街通り」と呼ばれ、明るいモダンな街並みに姿を変えてきています。



【学区地図】